

学んで知ることは大切である。今更言うことでもない。しかし、学んだことを実践することのほうが遙かに重要である。学問というものは実践に至って初めて評価される。実践されなければ確かなことは分からず、何も始まらない。中国戦国時代末の思想家・儒学者である荀子は、このことを次のように戒めている。

聞かざるはこれを聞くにしかず　これを聞くはこれを見るにしかず  
これを見るはこれを知るにしかず　これを知るはこれを行うにしかず  
学はこれを行うに至りて止む

(何ごとに限らず、聞かないより聞くほうがいい。ただ聞くより見るほうがいい。ただ見るより分かるほうがいい。ただ分かるより実践するほうがいい。学問は実践に行き着かなければ意味がない)

荀子という性と悪説で有名である。知識を口にすることは容易でも、実践は容易ではない。実践には志と勇気、気概が必要である。

21世紀に入って日本の国際的地位が低下している。このことは、GDPをはじめ様々な統計数値に如実に表れている。テレビ番組や書籍、雑誌等で国際ランキングなどを見て愕然とすることが増えた。

私たちは、本当に必要なことを学び、精一杯実践してきたのか、ちょっと立ち止まって考える時期にきているのかもしれない。こういったことを考えるとき、教育の責任というものに思いが至る。教育の責任、すなわち教員にも責任があるのではないか。

ここで教員の弱点について考えてみたい。ここ数年来、国や県レベルで、よく学力調査なるものを実施している。計画して実施する。その結果を見て分析する。ここまでは慣れているし、ある程度はできている。だが、分析結果からの対応策となると、急に弱くなる。PDCAサイクルでいうところの「A」が弱い。もう少し正確にいうと、対応策はあるのだが実践に至らない。批判を恐れずにいうと、学力調査を実施して終わりの状態に近いのではなからうか。

学力低下という問題があるから調査をし、分析して対応策をもとに学力を向上させようという話のはずである。そもそも国際的な学力調査における日本の子どもの学力問題に端を発している。実践が何より重要なのである。

『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』という衝撃的なタイトルの本が新井紀子先生により世に出た。RST（リーディングスキルテスト）により、新井紀子先生のおっしゃっていることが裏付けられている。だが、学校の先生方は、この重大な問題に対して、実践はおろか対応策、処方箋すら出せないでいる。

この背景には、今の日本人の実践力の乏しさ、気概の欠如があるように思う。教員もまた日本人なのである。目の前の子どもたちに足りないものがはっきりしている。このままでは子どもたちの将来が危うい。そう思えば、教員たるもの、何とかしようとして行動するだろう。それが、教員として気概であり、教員魂であろう。

私はこれを「ガッツ」という言葉で表現している。日本人にガッツがなくなった。ガッツのある教員が減っているということか。ガッツというと、時代錯誤のように聞こえるかもしれないが、志、勇気、気概どれも大切なのである。これらがないと実践は難しいし、実践力は身につかない。